

[報告]

2008年度 学びの杜・学術コース・文学探究講座 講義の概要

以下は、2008年度開講の「学びの杜・学術コース・文学探究講座」の概要である。「文学探究講座」の各テーマと担当の講師は、第1講「ヘレニズム文明を発掘する」周藤芳幸先生（西洋史学）、第2講「日本語の不思議」町田健先生（言語学）、第3講「美術作品の暗号解読：寓意画を読む」木俣元一先生（美学美術史学）、第4講「インド古典語 サンスクリットの不思議」和田壽弘先生（インド文化学）、第5講「中国古代の宇宙論」神塚淑子先生（中国哲学）であった。開講に際し、担当の先生方にビデオ撮影を許可していただき、後日、概要をまとめたのが以下の記録である。文字化については、ビデオテープを参考に、中等教育研究センターの責任において、教育発達科学研究科院生の岩瀬真寿美さん、宮崎明子さんに依頼し作成した。なお、講義内容の記述に関する不備については、当センターの責任である。

1. ヘレニズム文明を発掘する

周藤芳幸先生（西洋史学） 2008年7月30日（水） 10：30—12：00

概要：ヘレニズム文明はギリシア文明とオリエント文明との出会いから生まれた。この授業では、その時代に生きた人々の暮らしを、エジプトで行っている遺跡の発掘成果から復元する。

（資料：パワーポイント用配布資料A 4×7枚、資料A 4×1枚）

【高校までの勉強と大学での研究との相違点】

高校生までの勉強と大学での勉強との相違は、高校生までは受け身であるが、大学では能動的な勉強であるということである。高校までは、教科書に書かれていることを理解することが目標であり、大学では本に書かれていることが本当に正しいかを研究することが目標である。本日は、世界史の中でもヘレニズム時代をどのように研究しているか、それを研究することによって何が分かるのかをお話していきたい。それによって、大学での勉強法を知ってもらいたい。

【自己紹介】

西洋史学において古代ギリシア史を専門としている。大学時代は考古学を勉強していた。20代の後半にギリシアに留学し、その後、名古屋大学で教えている。今日お話しするヘレニズム文明についてはまだ本にまとめていないが、それより以前の古代ギリシア文明については著書がある。

【ヘレニズム時代とは？】

地中海を中心とする地域において紀元前4世紀の末から1世紀の末まで、およそ300年間のことを言う。この間何が生じていたのが根本的な関心としてある。高校の世界史ではあまり深くは取り上げられない部分である。アレクサンドロス大王の東征の後、すぐに地中海を動かしたのはローマではなかった。後半はローマであると言えるが、それ以前には、アレクサンドロス大王の後継者たちが築いた諸王国とポリスの伝統を継承する都市国家が動かしていた。本日はその中でも、中エジプト・アコリス遺跡を中心に見ていく。

1997年から毎年夏に、エジプト中部のアコリスという遺跡で発掘調査をしている。ギリシア文明が地中海に拡大してきた時代、そしてローマに吸収される時代のプロセスを見ていく。

【アコリス遺跡】

エジプトのナイル川の中流域、中エジプトにある。エジプトは大きく二つに分かれている。現在のエジプトの首都はカイロであり、カイロの北にあるデルタ地帯は大変肥沃な平野となっている。カイロから南側には砂漠がある。古代において、カイロの北を下エジプト、南を上エジプトと呼んでいた。現在においては、上エジプトを中エジプトと上エジプトに分けて呼んでいる。

アコリス遺跡はカイロからおよそ200キロのところにある。そこには、ローマ時代の後まで人が住んでいた。1980年代から、日本はその発掘権を獲得して、90年代初めまで発掘調査を続けた。1997年からは、新しい体制でその発掘調査を再開しており、現在に至っている。新しく発掘調査を始めて後、ヘレニズム時代の石材加工場が見つかった。これをきっかけとして、エジプトにおけるギリシア系の支配者がいた時代、すなわちヘレニズム時代について考えることとなる。

【岩石砂漠とナイル沖積平野の対照】

現在、平野部では夏はトウモロコシ畑、冬は麦畑になっている。岩石砂漠に点々と空いている穴は墓である。村は岩石砂漠と平野部の縁にあった。平野部は生きている者の世界、岩石砂漠は死者の世界とすることができる。生きている者の世界と死んだ者の世界がはっきりコントラストをつくっていた。現在の我々は、日常的に死者の世界について考えるということをしないが、エジプトでは生きている者の前に死者の世界が立ちはだかっていた。エジプトの人が死後の世界について関心を持っていたのは、このような環境に規定されている部分も影響しているのではないだろうか。他方、ギリシアではあまり死者の世界に関心がないようだ。

【ヘレニズム時代以外の遺跡】

南から見下ろしたアコリス遺跡の都市域において、西方（ネロ）神殿がある。ネロはローマ時代の皇帝である。また中央（サラピス神殿）がある。サラピスとは人工的につくられた神の名である。これはローマ時代に造られた。ラテン語ではセラピスと言う。また、コプト教（古いキリスト教）に関わる遺跡がある。エジプトはイスラム教の国であるが、現在でも住民の1割ぐらゐはキリスト教信者である。特に中エジプトでは2～3割がキリスト教徒である。これらの遺跡はギリシア系のもの（ヘレニズム時代のもの）ではない。ヘレニズム時代より以前のものか、あるいはヘレニズム

時代の後のローマ時代のものである。

【ヘレニズム時代の遺跡】

では、ヘレニズム時代の遺跡を見ていく。プトレマイオス5世の奉納碑文がある。碑文とは、岩を刻んで文字を彫ったものである。これは以前から皆が知っていたが、崖にあるため詳しく調べる者がいなかった。そこで、崖に宙づりの状態で調べていった。そこにはギリシア語で「プトレマイオスの子プトレマイオス王（5世）のために、（この王は）偉大な顕現神であり恩恵神（であるが）、エルゲウスの子アコリスが救済女神イシス・モキアスに（捧げた）」と彫ってあった。この碑文がある以上、プトレマイオス5世の生きていた時代（ヘレニズム文明の3分の1が過ぎた頃の時代）に、この地域に人が住んでいたことは確かと言うことができる。このように考えて、1997年から新しい発掘を始めたのである。

【都市域北端区における発掘成果の意義】

1997年からの新しい発掘により、加工途中の石灰岩ブロック埋土からヘレニズム時代の文化層が検出された。ここから、物質文化としてギリシアからの強い影響があったことが分かる。首都アレクサンドリアは地中海に面しているため、そこでヘレニズム現象が起こったのは当然とすることができる。しかしながら、アコリスという内陸部にもヘレニズム文化が確実に浸透していたことが判明した。

さらに、プトレマイオス5世への磨崖碑文の背景が明らかになってきた。すなわち、アコリスで採取される石灰岩を加工して、それを首都アレクサンドリアに送っていたということが分かってきたのである。アレクサンドリアのプトレマイオス5世とのつながりがあったからこそ、アコリス遺跡にあった磨崖碑文のような碑文が刻まれているということが分かったのである。

【膨大な地中海系のアンフォラ（交易用ワイン壺）の破片】

アンフォラとは、ワインだけでなく、何を入れても良い壺である。これらの78%がロドス（エーゲ海に浮かぶ島）産である。エジプトは地中海と結びついていた。エジプトはアフリカに属するが、ナイル川によって作られた世界であり、そのナイル川は地中海に続いている。このような地形を見ても明らかのように、エジプトはヨーロッパと無関係にあった世界ではなかった。このことを、我々の考古学の調査によって確認することができた。そこに発掘調査の意義がある。

【アンフォラとは何か】

アンフォラ（本来は両側に採手のある容器の総称）は液体を輸送する容器である。底が尖っているという、特徴的な形をしている。採手は必ず二つある。ロドスで作られていたアンフォラは、採手が鋭角に曲がっており長い。

壺の底が尖っている理由は、運ぶ時に採手だけを持つと重すぎて採手が壊れてしまうからである。したがって、先の尖った壺の底を片手でつかみ、採手にはもう一方の片手を添えるようにして壺を持ち運んだようである。他にも壺の底が尖っている利点として、ぎっしりと壺を並べることができ

るという点がある。さらにアンフォラは、商船に積むことによって錘となるという意義をも持っていた。

アンフォラの意義として、その採手の上の部分にスタンプが押されており、それによって詳細な編年（年代決定）が可能となるということがある。壺の形とスタンプから、その壺がどこで作られたものなのかが分かる。このように産地同定が容易であることから、交易ルートを復元することができる。アンフォラはこのように、考古学的証拠としての重要性を持つ。

【東地中海とロドス】

アレクサンドリアとロドスとの間の航海は、風の影響もあり、反時計回りの円環航海であった。ヘレニズム時代より前にもこの二地点は交易をしていたが、ヘレニズム時代になるとアンフォラを通じてより関係が強くなった。

【アンフォラのスタンプ】

採手の上のスタンプの例を挙げる。片側は「アンティマコス+杖のマーク」であり、もう片側は「神官アリストンの年、アルタミティオス月」というスタンプが押されている。古代ギリシア世界では、年の規定を王の治世によって行うのではなく、一年交代の神官の名によって行っていた。アリストンという神官の年が紀元前167年であることが、別の資料から分かっている。そこで、この壺がその年に作られたということが確実に分かる。

また、アンフォラのスタンプの形として、バラが頻繁に使われている。バラはロドンと呼ばれ、当時、ロドスの人々が自分たちの国の由来として考えていたものである。ロドスのコインにはバラの絵が押されていた。

1997年から2001年まで、アンフォラは300点ほど出土した。エジプトからこのように多大のギリシア系のアンフォラが出土するということは非常に意外なことであり、学界でも非常に画期的なことだとされた。これについての報告書を2005年に英語で刊行した。情報を公開することは学界における非常に重要な責任である。

【アンフォラの年代分布】

ロドス産のものだけしかアンフォラの年代は分からないので、それらだけに絞って年代分布を調べた。予想では短い期間に分布が集中すると思っていたが、そうではなく、長い期間にわたる非常にきれいな正規分布が描かれた。

これはワインのみの移動を示しているのではない。まず、エジプトと地中海世界との関係、次にアコリスと首都アレクサンドリアとの関係という二重の関係が示されているのである。前者は具体的には、ロドスによる海上交易の展開と、エジプトからの小麦と地中海からのワインという交易を示している。後者は具体的には、アコリスからの石材とアレクサンドリアからのワインという交易を示している。これについての証明が欲しいが、アレクサンドリアでの発掘は難しい。なぜなら現在、アレクサンドリアは大都会であるということ、また堆積が厚いため発掘調査に適さないからである。掘り出すと、地下水がすぐに湧いてきてしまうことも理由の一つである。したがって、文献

などによって間接的な証拠を得ている。

【年代分布から分かること】

ロドスが紀元前164年に政治的にローマに屈した後、地中海交易は依然として活発に続けられたことが分かる。このことは、政治的に最も活力がある時期が必ずしも、経済的に最も活力がある時期ではないということを示唆している。政治的にローマによって地中海世界が征服されていく前に、ロドスによる海上交易によって東地中海は経済的文化的一体化が進められていたということが分かる。この一体化がなされていたからこそ、ローマの東地中海征服はスムーズに進んだということが分かる。ローマが軍事的に強かったから征服がスムーズであったというわけでは必ずしもないのである。

【今後の調査】

ザウリエト・スルタン古代採石場の調査を現在行っている。ここの壁には、当時の人が書いた文字がたくさんある。何が書かれているかを現在研究している。これは、今まで全く知られていなかった資料である。同じ内容がギリシア語とエジプト語で並記されている。ヘレニズム時代において、支配者は公文書にはギリシア語を、日常的にはエジプト語を使用していた。

(以上が講義記録である。担当の先生は、発掘調査をしようとした1997年はエジプトの情勢が悪化していたこと、一般的に大学の夏季休暇に行う発掘調査を冬期休暇に行った経緯、発掘調査では地面を見ると古代、顔を上げると現代であり奇妙な感覚を持つこと、調査の現地では蠅が多く苦労したことなどについての話を交え、生徒たちにとって大変興味深く、また分かりやすく丁寧な説明であった。)

2. 日本語の不思議

町田 健先生 (言語学) 2008年7月30日 (水) 13:00—14:30

概要：日本語は難しいとか、最近では日本語が乱れていると言われるが、本当にそうなのかを、言語学という学問の視点から解説する。

(資料：A4×4枚)

【自己紹介と導入】

言語学を専門としている。今回は、皆さんが使っている日本語が、世界の中でどのような特徴を持っているのかというお話を簡単にしていく。英語では、「Tom went to school.」という文章を疑問文にすると、17世紀ぐらいまでは「Went Tom to school?」と言っていた。しかし現在は「Did Tom go to school?」と言う。「Did」のような文法を使う言語は英語の他にない。また、否定文についても、昔は「Tom went not to school.」と言っていた。関係代名詞を使う言語で、それを省略するという言語も英語しかない。フランス語、ドイツ語、あるいはインドネシア語も関係代名詞を使う言語であるが、英語のようにそれを省略するということはない。英語は特殊な言語なのである。

日常的に英語を使う人は世界に3億5000万人ぐらいいる。その他、日常的ではないが英語を使うという人も含めれば世界に10億人ぐらい英語の話者はいる。

【世界の言語】

世界で使われる言語は現在7000ほどあると言われている。中には、話者が30人しかいないなど、少数の人にしか使われていない言語もたくさんある。例えば、パプア・ニューギニアの公用語であるトク・ピシンでは、「私は見る」という文章を「mi lukin」と言う。このように英語と似ている言語であるが英語とは異なる。時代の移り変わりとともに、世界の言語の種類の数には変わっていくものである。

7000もの言葉が出来たといっても、そのもとはどのようなものであったのだろうか。言語が出来たのは20万年ほど前であると言われている。人類は言葉を使う動物である、ということから、人類が誕生したということは言葉を使っていたということを意味する。それがどのような言葉であったかについては分からない。文献が見つからない限り、分からないのである。日本語であっても、8世紀の日本語までしか遡って分かることはない。人類の起源が一つであるということは、人類の言葉の起源も一つであるということを示している。

【インド・ヨーロッパ語族】

同じような意味を表す語が似ている言葉同士を見てみよう。例えば、古代インド語（サンスクリット）、ギリシア語、ラテン語、ゴート語（現在のドイツ人やイギリス人の祖先に近い人が話していた言葉）、及び英語において、「父」、「3」、「イヌ」、「知る」、及び「来る」という語を比較してみよう。「父」は順にpitar, pater, pater, fadar, fatherである。「3」は順にtrayah, treis, tres, threis, threeである。「イヌ」は順にs'va, kuon, canis, kunds, houndである。「知る」は順にjanami, gignosko:, gnosco, kunnan, knowである。「来る」は順にgamanti, baino, venio, qiman, comeである。このように比べてみると、相互によく似ていることが分かる。よく似ているということはこれらの言語の起源が同じということを示している。これらはインド・ヨーロッパ語族のものであり、今から5000年から1万年ぐらい前までは一つの言葉であった。このような語族（起源が同じであることが、学問的に証明できる諸言語）が世界にはたくさんある。

【日本語は何語族？日本語の位置づけ】

日本語がどの語族に属するかは分かっていない。日本語の単語と、意味や語形が似た単語を持つ言語は知られていないのである。朝鮮・韓国語は文法については日本語と似ているが、単語は全く似ていない。したがって、同じ語族であるとは言えない。アイヌ語、朝鮮・韓国語についても語族不明の言語であると言える。

このように起源的には、日本語は仲間がいない言語であるけれども、言葉全体の性質から見ると、仲間が多い。例えば、日本語では、どのような名詞であっても主語であるならば「が」を付ける（「は」は主題を表すもの）。目的語であれば「を」を付ける。他方、英語では、語順によって、主語や目的語であることを表す。世界の言語の中の6割が「が」や「を」のようなものを付けて主語や目的

語であることを表す言語である。ここで言う日本語のような部類を膠着語（単語の後ろに、文法的な働きを表す単語をいくつも並べることができるもの。朝鮮・韓国語、満州語、トルコ語、ツングース語、スワヒリ語、チベット語など）と呼び、英語のような部類を孤立語（文法的な働きを表す単語をあまり使用しないもの。主語と目的語を語順によって区別するもの。中国語、タイ語、ベトナム語など）と呼ぶ。後者には英語や中国語が含まれるため、話者の数はこちらの方が多い。しかしながら、言葉の種類としては孤立語の方が少ない。後者については、なぜ語順がSVOという順であるのかについては分かっていない。

【日本語の発音は簡単！日本語にはアクセントがある！】

日本語は「a, e, i, o, u」という母音と、「p, t, s, ts, h, b, d, z, m, n, r」という子音によって成り立っている。日本語には、lとrの区別がなく、またfやvの音がない。日本語の「ん」の音は難しい。例えば「全員（ぜんいん）」と言う時、二つの「ん」の音は異なる。「ん」の音は、平安時代の初めまでは日本に存在しなかった。その後、日本に漢語が入ってくることにより、使われるようになった音である。

次に、日本語のアクセントについて説明する。東京式アクセントに従えば（●高い、○低いとすると）、「雨、海、亀」は「●○」というアクセント、「飴、膿、瓶、靴」は「○●」というアクセント、「ミカン、枕、テレビ、ノート」は「●○○」というアクセント、「心、頭、刀、走る」は「○●○」というアクセント、「未完、決まり、国語、柱、机」は「○●●」というアクセントとなる。アクセントについては理屈によって説明することはできない。

【「活用」とはなんだろう・活用の種類】

活用（後ろにどのような単語が来るかによって単語の形が変わること）について説明する。例えば「行く」は「行かない」、「行きます」、「行く」、「行けば」のように形が変わる。活用によって、後ろにまだ単語が続くことが示される。もし活用をしない場合、例えば、「私は行きたいとないかもしれない」と言うと、文章の途中でどんどん意味が変わってしまう。また、日本語には不規則動詞がほとんどない。日本語では、「する」と「来る」のみが変格活用である。他方、ギリシア語はほとんどが不規則動詞であり、規則動詞はあまりない。

【ら抜き言葉はどうしてあるのか?・「お飲み物はよろしかったでしょうか」はよろしかったのか?】

「れる」や「られる」を付けるとき、それが受け身、あるいは可能、あるいは尊敬の内、どの意味であるかについては文脈で決めるしか方法がない。昔は「行かれる」というように言っていたが、受け身、可能、尊敬の内、最もよく使う意味は可能であるため、可能を表す動詞を別に作った方が良さだろうということで、「行ける」という動詞が作られた。五段活用の動詞については、こういったことが江戸時代に普及していった。例えば、「行ける」、「書ける」、あるいは「話せる」というような動詞の普及である。

その後、「見る」や「食べる」といった一段活用の動詞についても、「行く」や「書く」という五段活用の動詞のように可能の意味を表す動詞を別に作るということが行われた。「見られる」、「食

べられる」という可能を表すときに、「見れる」、「食べれる」と言われるようになったのである。しかしながら、昔は一段活用の動詞についてはこのようには言わなかったので、これらを「ら抜き言葉」と呼び、使わないようにという指導がなされてきているのである。おそらく、皆さんが大人になる頃には、「ら抜き言葉」も問題視されていないだろう。

注意すべきことは次の点である。すなわち、「行ける」と言えば可能の意を表しているにも関わらず、そこにまた「れる」を付けて、「行ける」という言葉が使われるという間違いである。これは二重に可能の意味を表していることになる。

また、最近問題視されている「お飲み物はよろしかったでしょうか」について説明する。本来、「お飲み物はよろしいでしょうか」と言わなければならないという指摘がなされるが、他方、現在を過去にすることによって丁寧度を上げるということは言語としてよくあることである。例えば英語では、過去のことを言うわけではないのに、過去形を使う時がある。「You had better go.」や「It's time you went to bed.」という表現である。また、「may」を「might」と表現する時には、それによって丁寧にするということが行われている。したがって、「お飲み物はよろしかったでしょうか」という表現は、言葉としてあり得る表現なのである。

【冠詞がなくていいのか？・日本語は知識を重視する・日本語は関係を重視する】

冠詞（名詞が表すモノを、相手が特定できるかどうかを表すための単語）は、英語では絶対に必要なものである。英語では、theを使う場合とaを使う場合の区別が難しい。aを使う場合は、そのものがどれでも良いときである。例えば、「Open a window.」と言うときには、話し手はどの窓でも良いと考えている時であり、「Open the window.」と言うときは、話し手は聞き手がどの窓を開けるかを知っているというように考えている時である。他方、日本語には冠詞がない。

日本語では、話し手が直接知ることができる事柄と、間接的にしか知ることができない事柄を区別する。聞き手が知っているかどうかを、「ね」か「よ」によって区別する。聞き手が知っている場合は「ね」を使い、知らない場合は「よ」を使うのである。

また日本語には敬語（尊敬語、謙譲語、丁寧語）がある。誰かと会話をするためには、前もって自分と相手がどのような社会的関係にあるのかを正しく判断しておかなければならない。

【日本語はどうして変わるのか・八世紀の日本語でも分かる！】

言語は必ず変わるが、なぜ変わるのかについてはまだ分かっていない。例えば、千年前の英語は現在の英語とずいぶん異なる。他方で、日本語でも八世紀（1200年前）の日本語と現在の日本語は異なる。しかしながら、日本語の場合、意味を推測することができるぐらいの変わり方である。例えば、「父母が 頭かきなで 幸(さ)くあれて 言ひしけとばぜ わすれかねつる」（『万葉集』巻二十、防人歌）や、「東(ひむかし)の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ」（『万葉集』巻一、柿下人麻呂）の歌を現在に詠んでも、その意味を推測することが可能である。

（以上が講義記録である。講義中では、英語の分かりにくい発音について、語学を勉強することの苦

劣について、一つの国の中でどこの地域の言語を標準語にするかについての論争について、様々な言語の特徴についてなどの話がなされ、高校生が興味を持つ話を交えた楽しい講義であった。）

3. 美術作品の暗号解読：寓意画を読む

木俣元一先生（美学美術史学） 2008年7月31日（木）10：30—12：00

概要：美術作品の中でも一番謎が多いのが寓意画というジャンルである。簡単な寓意画から未だに答えが見つからない寓意画まで、いろいろな作品を紹介する。

（資料：A4×15枚）

【自己紹介、研究領域紹介】

文学部で美術史を教えている。研究は、実際に作品をつくることではなく、美作品を研究する、美術史という研究分野である。大学に来るまで、そういった学問があるということを知らなかった。

【寓意画：イントロ】

寓意という言葉も日常生活では聞き慣れない言葉であるが、寓意画というのは、一種の暗号で書かれた作品である。絵はほぼどの作品でも意味を持っており、それを読み取ることが大事である。絵は、物語として描いている場合や人間を描いている場合もあり、様々だが、その内容を理解することによって、美術を楽しむことができる。寓意画は読み解くことが難しく、専門家でも分からない点が多いジャンルである。

【寓意画とは？】

アレゴリーともいう。抽象的な概念や思想を、人物を中心としたイメージの組み合わせで表現する方法である。抽象的な概念や思想というのは目で見ることができない。それを表現することは難しいが、抽象的な概念を可視化したいという願望が人間にはあった。研究においては15～18世紀の絵画が中心で、やや古めの美術を対象にしている。これらは後の近代、現代の美術にとって重要な意味を持っている。抽象的な概念を可視化したいという願望は東洋でもあるが、ヨーロッパの方が強く、この願望は本来ならば言葉で行うべきものであるが、イメージで表す場合は、全体で捉えられる形で表すことができる。

【擬人像】

一つ概念を一つの人物で表すというのが一つの約束事で、ヨーロッパの美術ではよくある。これを擬人像と呼ぶ。これを寓意に含めるということもある。これはヨーロッパ独自のもので、アジアでは見られない。地誌的な要素も、時間、季節（時間概念）、いろいろな物を表す。擬人像の体系は古代ギリシアやローマに起源があり、中世にも継承されたが、一番発展したのがルネッサンスから17世紀にかけての時代である。擬人像は西洋美術を理解するためには重要な項目である。読み解くためにはある種事典のようなものが必要である。以下、絵を提示しながら説明する。

【ヤコベッコ・デル・フィオーレ《正義》】

抽象的な概念はだいたい女性で表すことが多い。擬人像はそのほとんどが女性で表される。ラテン語には名詞に性別があり、抽象的な概念の単語はだいたい女性名詞であることと関係がある。絵の女性は左手に天秤ばかりを持っている。これは善と悪を厳密にはかり分けるという意味がある。右手に剣を持っている。これは裁きを表現している。さらに、ライオンの上に座っているが、権威のあるものが腰掛ける。王冠をかぶっていることから、ある種の権威を表している。

【ヴェロネーゼ《勤勉》】

絵の人物は、クモの巣のようなものを編んでいる。その下に籠があり、そこにはさみの先端が見え、刺繍や編み物をする道具がある。刺繍といった作業は短時間でできるものではない。よって勤勉が必要ということになる。

【チェーザレ・リーパ『イコノギア』《真実》の擬人像】

ヌードの女性が立っていて、右手に太陽、左手に筆ペンと書物を持っていて、足で地球を踏んでいる。このような人は現実にはいないので、擬人像と考えることができる。チェーザレ・リーパという人物が『イコノギア』という擬人像をまとめて体系化した本を描いた。

【ジャック・ブランシャール《慈愛》】

お母さんの周りに子どもがまわりついている。具体的なイメージで示されていることから、慈愛の絵であるということは分かりやすい。擬人像は具体性が増していくと分かりやすいが、その反面、現実の描写か擬人像であるかの区別がつかなくなる。

【ラ・イール《文法》】

文法は毎日少しずつ勤勉に身につけていかなければならない。描かれている人が鉢植えに少しずつ水を与えているように、文法を身につけていくということである。この絵も変なところがあるが、日常生活の描写かどうか区別するのは難しい。

【ウスタシュ・ラ・シュウール《クリオ、エウテルペ、タリア》】

三人の女性のうち一人の女性が右手にラッパを持ち、頭に月桂樹の冠をかぶり、左手に本を持っている。一人の女性はフルートを奏で、もう一人は仮面を持っている。ラッパを持っている女性が歴史、フルートを持つ人が音楽、仮面を持つ人は喜劇を表している。それぞれ芸術を司る女神である。この絵も擬人像か判別が難しく、このような人が実在する可能性も考えられる。

以下の女性像は鏡を持っている。これらはよく似ていて意味の区別が難しい。鏡を持った女性像は高慢、虚栄、淫乱、正義などを表すが、これらはかなり違う意味である。

【ムムリンク《虚栄》】

描かれているのは、小さな鏡を持っている女性である。女性はヌードで長い髪を下ろして描かれ

ているが、現代では長い髪を下ろした女性もいるが、昔だと何か意味がある。ひどい悲しみ等があるときにこういう髪型にしていた。この絵は虚栄を表すが、現世が虚しいという意味である。キリスト教や仏教には人間の人生ははかなくて虚しいものであるという発想がある。

【《虚栄》の擬人像（16世紀）】

この女性はヌードで鏡を見ている。後ろには骸骨の不気味な男がおり、手には砂時計を持っている。この砂時計は時間の流れを表している。下に描かれている車輪や翼も時間と関係していて、車輪が転がるように、あるいは鳥が翼で飛んでいくように時間というもののはどンドン過ぎ去っていくということを暗示している。この女性も今は若く美しいけれども、いつかは年老いて死んでいくであろうということを表している。

【ティツィアーノ《虚栄の擬人像》】

この女性も鏡を持っていて、財宝が映っている。この女性は肉体の美しさを誇示はしていないが、宝飾品等の財産を映し出している。財産を持っていても、死後の世界には持っていけないから虚しいという意味である。

【ハンス・バルドゥング・グリーン《鏡と蛇を伴う女性像》】

タイトルはそのままだが、作品のタイトルは画家が残しているのではなく、後の人がつけるものである。このようなタイトルは、その絵が何を表しているのかが分かっていないから、そのままのタイトルとなっている。蛇というのは悪いことの象徴として使われることから、悪を踏んでいるから良い意味ではないかと捉えられ、虚栄ではないのではないかと考えられている。

【逸名のフランス画家《正義の擬人像》】

こちらも鏡を持っているが、雰囲気はかなり違っており、真面目そうである。天秤ばかりを持っていることから、これは正義ではないかと言われている。

【ジョヴァンニ・ベッリーニ《賢明》】、【シモン・ヴェーエ《賢明》】

これはヌードで長い髪をおろしているので虚栄の擬人像と似ているが、賢明を表している作品である。彼女は蛇を持っており、蛇は分かりにくい要素だが、ここでは良い意味で使われている。蛇は踏まれている時には悪い意味で使われるが、手に持っている時には良い意味になる。聖書の中では蛇というのは賢い動物だと言われていることから、この絵は賢明を表すと考えられる。実はこの女性はルイ13世の王妃であるアンヌ・ドートリッシュという人がモデルである。自分の宮殿の内部に肖像を描かせる時に、自分の肖像を賢明の擬人像に表した人もいる。

以上、擬人像を見てきた。次は単純な寓意画を見ていく。

【単純な寓意画】

四季や四大元素（中世では元素が4つだと思われていた）、五感といったような単一あるいは一組

の概念を表す寓意画である。

【プッサン《春》】

これは風景画で、春夏秋冬の4枚のシリーズものである。画家は春という季節を風景で表している。その中に裸のカップルがいる。女の人が男の人の腕を引っ張って、指差している。その先にはリンゴの木がある。この二人は旧約聖書によると最初のカップルである、アダム（男性）とエヴァ（女性）である。彼らはエデンの園という楽園にいて、リンゴの木はそこに生えていた。リンゴは禁断の果実である。アダムとエヴァはそれを破って食べてしまう。それによって知恵を身につけ、裸であることに気づく。それに気づく前であるので、裸である。これは、一年の始めの季節である春と、歴史の中で最初の出来事であるアダムとエヴァの物語を代用している。よく見ると、空を白い服を着た人が飛んでいる。これは神様を表していて、神様というのは白い服を着て、白髪のみげを生やしたおじいさんと言うイメージがあるが、それがつくられてきたのがこの時代である。

【アルチンボルド《夏》】

顔がぷくぷくした横顔の人物のように見える。夏に収穫されるものを使って顔を構成し、夏を表している。服は小麦の穂でつくられていて、襟に画家の署名が織り込まれている。

【ガイド・レーニ《運命》】

これは擬人像とも言える。黒い球体が世界で、その上を運命が通り抜けている。運命が世界を支配している。キューピッドが運命の髪を引っ張っており、これはチャンスが過ぎ去る時に少し後ろ髪を捉えることならできるということを表している。

【セバスティアン・ストスコプフ《夏あるいは五感》】

夏を表しているという説と五感を表しているという説がある。楽器があるので聴覚、鏡があるので視覚、果物は味覚、花は嗅覚、チェスボードは触覚であると言われている。

【テオドール・ロンバウツ《五感の寓意》】

これははっきりと五感を表している。左の人は鏡を持っており、眼鏡を持って遠くを見ている。よって視覚に関係している。隣の人は楽器を奏で、足下に楽器がおかれていることから聴覚に関係している。中央の人は盲人で、彫刻を触っているので触覚を表している。水に足をつけている人は、右手にワイングラス等を持ち、周りに食べ物があるので味覚、その隣の人はにんにくをもっている。嗅覚を表している。五感をワンセットに表現している。

これまでは単純な寓意画を見てきた。次に複雑な寓意画を見ていく。複数の要素を組み合わせることで思想等を表している。

【ボッティチェリ《誹謗》】

この絵は古代ギリシャの画家が描いた絵と同じタイトルの絵を描写した文章があり、それをもと

にボッティチェッリが描いた。よって、文章と比較することで絵を解読することができる。とても長い耳を持った男が描かれ、その傍らには二人の女性、美しい女性の外見をしているが狡猾な無知と猜疑がささやいている。彼は誹謗の犠牲者を表していると考えられる。さらに二人の女性、裏切りと欺瞞が誹謗に付き添っている。誹謗を導くのは醜い男で、それは怨恨の化身と考えられる。彼女たちの後ろから来るのは後悔で、それに続くのは恥ずかしげな真実である。このように、説明文によって絵から思想を読み解くことができる。誹謗というのはどのようなものなのかを擬人像を用いて表現している。このように文章が残っているのは稀である。

【ボッティチェッリ《春（プリマヴェーラ）》】

草地に9人の人が集まっており、全体として何を表しているのかは分からないが、人物を特定することができる。すべての人物はギリシャ神話に出てくるが、対応する神話はない。

青白い男は、口から風を吹くゼフィロスという神である。風の神様に捕まった女性は大地の妊婦であるクロリスで、花を口から吐き出している。彼女は西風のゼフィロスに花嫁にさせられ、花の女神であるフローラに変身する。西風が吹くことは春を意味し、自然の変化を擬人像を用いて表している。地面にはいろんな種類の花が咲いており、これも春の訪れと関係がある。フローラの隣には花に包まれた女性ヴィーナスが立っている。ヴィーナスの表情については見る人によって微笑んでいるといたり、憂いを含んだ表情という人もいる。それはヴィーナスの顔が左右で違うことから来ている。ヴィーナスの上にはキューピッドが飛んでいる。キューピッドはヴィーナスの子どもだとされる。ヴィーナスの隣には貞節、愛欲、美を表す三美神が踊っている。左から愛欲、貞節を表している。一見すると対立する概念を表しているが、それをつなげているのが美である。ラファエロが描いた三美神でも、そのように描き分けられている。その隣にるのがヘルメスで、翼の付いた帽子と靴を身につけている。神様のメッセンジャーとして働く。彼は右手に魔法の杖を持っており、それで病を治したりすることから、医術の神でもある。また、口が達者なので詐欺師や泥棒の神様でもある。

【プロンツィーノ《愛の寓意》】

この作品は愛を表現している。画面中央に女性と少年がおり、その右に男の子がバラをまき散らそうとしている。女性が左手に金色の球体を持っている。愛の寓意の中でヌードの女性が出てくると、彼女はヴィーナスと予想される。金色の玉は、ルーベンスのパリスの審判という絵において、三人の女神からヴィーナスを選び、その際に金色のリングをヴィーナスに与える。この神話から、黄金の球体はリングで女性はヴィーナスであることが分かる。絡んでいる男の子はキューピッドである。目立つ人たちは愛の快楽を表している。その影には愛の暗黒面が表されている。髪の毛をかきむしっているのは、嫉妬を表している。女の子は右手と左手が反対につき、下半身は鱗が付いていて、足はライオンのようにになっている。この子は欺瞞を表している。愛には嫉妬や嘘がつくことを表している。右上にはおじいさんがおり、肩に砂時計をのせている。彼は時の翁で、時間を表す。この時の翁は青い布を引っ張っている。時間は真実を明かそうとしている。愛は一見すると快楽のように思われるが、その裏には嫉妬や欺瞞があり、時間が経つとともに愛の真実が明らかになるこ

とを表している。

【フェルメール《絵画芸術》】

この絵は最近まで画家のアトリエというタイトルがつけられ、日常的な生活が描かれていたと思われていたが、実は絵画芸術を表す寓意画ではないかと考えられるようになっていく。描かれている女の子は月桂樹の冠をかぶり、本を持っており、歴史のムーサ、クリオの姿をしている。テーブルの上にはスケッチブックがおかれ、画家も描かれていることから、絵画や芸術と関係がある。壁には地図がかかっている。この地図を描写するのは、世界を描写することであり、絵画の役割として世界を描写することという思想が見える。

【ヤン・ミーンセ・モーレナール《結婚の忠誠の寓意》】

女性が男性の右に立っている場合は、未婚であるので、右に立っているカップルは、未婚のカップルということが分かる。これから結婚するカップルに対して結婚が何であるかを説明しようとしている。中央の女性は膝の上に楽譜をのせ、歌を歌っている。その周りには音楽を奏でている人がいる。音楽というのは調和が大事であり、結婚においても男女間の調和が大事である。右側の男はワイングラスから水を出している。これは当時ワインを水で薄めることが推奨され、節制の美德とされている。イヌは忠実な動物の代表格なので、夫婦間の忠誠心を表している。また、召使いが食器を洗っている。この男性は食器にお酒が残っていないか見ており、酒に対する欲望を表している。この絵は偏った思想から描かれており、裕福な人たちが調和を重んじる理想を描き、階級の低い人たちは欲望に身をまかせていることを表している。このような絵を見るのは、市民階級であるから、絵にもバイアスがかかっている。メッセージにはバイアスがかかっていることに注意したい。

【ジョルジョーネ《嵐》】

この絵は意味がはっきりしておらず、説は20を超えている。どれもが決定的な証拠を持たない。結局答えがないという説さえ出てきている。これが寓意画であることも分かっていない。

【ホルバイン《大使たち》】

この作品は寓意画ではなく、肖像画である。二人の間には、斜めに引き伸ばされた不思議な物体が描かれている。実は右からある角度で見ると骸骨に見える。これは死を表している。私たちの目の前には死があり、普段は気づかないが、死は厳然と存在しているということである。また、右側のカーテンの裏にはキリストの十字架像が隠れている。魂の救済が約束されていることも表している。死と魂の救済がセットで描かれている。この絵は単なる肖像画ではなく、なんらかの思想を表した寓意画であると考えられる。

(以上が講義記録である。さまざまな寓意画の実物の絵を示しながら、その絵が示す内容について、描かれた当時の流行や絵のエピソード等を織り交ぜながら話をされていた。また、高校生には耳慣れない言葉を具体的に話すなどして、分かりやすい講義であった。)

4. インド古典語 サンスクリットの不思議

和田壽弘先生（インド文化学） 2008年7月31日（木） 13:00—14:30

概要：古代インドで使われていたサンスクリットという言葉には、日本語や英語にはない不思議な特徴がいくつもある。この授業ではそれらの特徴について解説する。

（資料：資料A 4 × 3 枚）

【自己紹介】

東洋学講座のインド文化学研究室に所属している。11世紀あたりから後のことについて研究している。仏教は紀元前5世紀に釈迦が始めた。イスラムの侵入があったことにより、インドから仏教は駆逐された。11世紀あたりから後についての研究であるため、仏教について研究しているわけではない。

サンスクリットというインドの古典語のおかげで、紀元前に著された書物を現在においても読むことができる。他方、ドイツ語やフランス語は紀元前には存在していない。また中国語は紀元前と現在のものとは異なる。日本語も古文と現代文とは異なる。

【サンスクリット（梵語）の「発見」】

インドの言葉としてサンスクリットがあるということは10、11世紀ごろから知られていた。どのような意味で、ここで「発見」という言葉を使っているのかということ、ウィリアム・ジョーンズ(1746-1794)というイギリス人によって、サンスクリットがギリシア語、ラテン語、ゴート語、ケルト語、古代ペルシア語と、動詞語根においても文法の形式においても顕著な類似があるということが発見されたという意味で使っているのである。彼は語学の天才であり、オックスフォードで勉強していた。「インド人について」という画期的な講演を1786年2月2日にカルカッタで行った。言語学者たちはこれに刺激を受けて、ヨーロッパ人の先祖が話していた言葉を復元できるのではないかと考えた。そして彼らは集まり、印欧比較言語学という分野を作り出した。これは画期的な分野であり、それによって言語の親戚関係が分かってきた。ギリシア語とラテン語がどこで結びつくのかなどという親戚関係である。言語の系統樹が分かってきた。系統樹によって、これまで知られていなかった言語を再創造するということができるようになった。そこで発見された言語の一つとしてヒッタイト語がある。以上のような学問上の成果があった。ウィリアム・ジョーンズはさらに、サンスクリットで書かれたカーリダーサの『シャクンタラー』や生活習慣を規定する『マヌ法典』を翻訳している。いずれも日本語で全訳があるので興味があれば読んでみると良い。

サンスクリットは日本には仏典の中の言葉として移入した。サンスクリットは梵語と呼ばれた。サンスクリットは現在のインドでも使われており、インド公用語22の内の一つである。話者は6106人（1981年国勢調査の結果）である。この話者の人数については厳密に正確かどうかは不明である。

インドは多民族国家である。例えば私の留学先のマハーラーシュトラ州ではマラーティー語を話す。人々はインドの公用語であるヒンディー語も勉強している。さらにサンスクリット語を勉強する人もいる。生まれた赤ん坊にはどうかというと、まずはマラーティー語で話しかける。そして4、

5歳の頃に父親からサンスクリットを習う。近代に至るまでは、サンスクリットに関する知識の伝達は男性のみのものであった。第一言語としてのサンスクリットの話者は原則的にいない。古代から、哲学書、医学書、地理のテキスト、文学作品については全てサンスクリットで著されてきた。したがって、サンスクリットを知らなければ、これらを勉強することができないという仕組みになっている。伝統的なバラモンの家庭ではサンスクリットを聞くことができる。ラジオやテレビでも週に1本ぐらいはサンスクリットの番組がある。留学していたブネー大学では1～2割がサンスクリット語の授業で、残りは英語の授業であった。

【インドの言葉（サンスクリットに限らず）】

インドの紙幣（100ルピー札）を例に挙げると、紙幣の中にはインドの公用語が13並んでいる（現在では15である）。アッサム語、ベンガル語、グジャラート語、カンナダ語、カシミール語、マラーヤラム語、マラーティー語、オリヤー語、パンジャブ語、サンスクリット、タミル語、テルグ語、ウルドゥー語である（現在は、コンカン語、ネパール語が追加されている）。

【サンスクリットとギリシア語・ラテン語との親近性】

サンスクリットとヨーロッパの言葉は親戚関係にある。文法の仕組みや単語などに親近性がある。「父」、「母」、「兄弟」、「新しい」、及び「3」という単語について具体的に挙げてみる。サンスクリット、ギリシア語、ラテン語、英語の順に「父」はpitar, pater, pater, father、「母」はmātar, mater, māter, mother、「兄弟」はbhrātar, phrater, frāter, brother、「新しい」はnava, neos, novus, new、「3」はtraya, treis, tres, threeと表記される。このように親近性を見て取ることができる。ヨーロッパの言語の先祖がサンスクリットであるということから、ヨーロッパではサンスクリットの研究が盛んである。

【サンスクリットのアルファベット】

デーヴァナーガリー文字、母音、子音について説明をする。子音については、横列（無声無気音、無声有気音、有声無気音、有声有気音、鼻音）と、縦列（硬口蓋音、軟口蓋音、反舌音、歯音、唇音、半母音《有声》、歯擦音《無声》、気音）について詳細に説明する。母音は日本語の「あ、い、う、え、お」に似ており、子音は日本語の「あ、か、さ、た、な」に似ている。さらに、分かりにくい発音を中心に説明する。英語圏の人は必ずどこかにアクセントがないと発音することができないが、日本語圏やドイツ語圏の人は平坦な発音をすることができる。したがって、サンスクリットは日本人にとって発音しやすい。

北インドはマラーティー語など、サンスクリットから分かれた言語が、南インドではサンスクリットとは全く異なる言語が使われている。パーニニ（紀元前5世紀頃）の『シヴァ・ストトラ』は、インド人がサンスクリットを勉強するとき使用する表である。

【名詞：男性、女性、中性】

ここでは「馬」という語を例として名詞を取り上げる。名詞には男性、女性、中性がある。ドイ

ツ語も同様である。フランス語には男性、女性がある。英語には性別はない。サンスクリットの性別は語尾によって90%ぐらいは判別することができるため、ドイツ語やフランス語よりは勉強に苦勞をしない。縦列の8格（主格、対格、具格、為格、奪格、属格、所格、呼格）と横列（単数、両数、複数）について説明する。一つの単語に24通りがある。主格は主語になるもの、対格は目的語になるもの（「～を、～に」）、具格は「～によって」、為格は「～（ため）に」、奪格は「～から」、属格は「～の」、所格は「～で」、呼格は「～よ」と訳す。他方、英語の格は4種類である。

【能動態と受動態（講義のハイライト）】

サンスクリットでは、受け身という言葉を使わずして受動態を説明する。そのときの原則は、①文章中の文法要素は意味を必ず表し、その意味に重複はない。②能動文と受動文は同じ一つの「事態」を表す、ということである。以下に例を示す。

・ラーマは	薪で	ご飯を	炊く。
rāmaḥ	indhanena	taṇḍulam	pacati.
(これを文法要素に分けると、)			
rāma-s	indhana-ina	taṇḍula-am	pac-a-ti.
(これを日本語に直すと、)			
・ラーマは、	薪・で	ご飯・を、	炊・く。

「行為主体」は動詞語根 (paca)-tiによって、「行為目的」は (taṇḍula)-amによって表される。

サンスクリットは日本語と同様に、主語がなくても文章が成り立つ。動詞だけで意味が理解できる。動詞語尾が行為主体を表しているのである。上の文を受け身にしたもののが以下の文である。

・ラーマによって	薪で	ご飯は	炊かれる。
rāmena	indhanena	taṇḍulaḥ	pacyate.
(これを文法要素に分けると、)			
rāma-ina	indhana-ina	taṇḍula-s	pac-ya-te.
(これを日本語に直すと、)			
ラーマ・によって、	薪・で、	ご飯・は、	炊・かれ・る。

「行為主体」は動詞語根 (pacya)-teによって、「行為主体」は (rāma)-inaによって表される。サンスクリットでは、決して受け身の文章としては説明していない。動作をする、あるいは受けるという考え方を使わないのがサンスクリットである。炊くという行為が中心にあり、行為主体（ラーマ）に焦点を当てればそれは能動の文章となり、行為目的（ご飯）に焦点を当てれば受け身の文章になる。日本人にとって文章を作るときに能動か受け身かは大切なことであるが、サンスクリットではそうではない。受け身という言葉を使わずに受け身を説明することができるということである。このように、サンスクリットを知ることによって、日常われわれが習っている文法を見直すきっかけ

けになる。

【高校までの勉強と大学での勉強との違い】

我々が高校までに習ってきた事柄も重要であるが、大学に入ると、これまで習ってきたことは本当にそうであるのかと疑うことが必要になる。常識が必ずしも本当のことを伝えているとは限らないということが分かる。大学では、暗記よりも疑って調べるといった要素が大きくなる。

(以上が講義記録である。講師の先生からの、生徒への問いかけを交えた、分かりやすい例の提示、日本との比較、日本語との比較、英語との比較などがあった。インドでコーヒーを飲むのと日本でコーヒーを飲むのを比較すると、日本で飲む方が10倍ぐらい高いことや、一般的に日本でヨガと呼ばれるものの正式発音はヨーガであることについても楽しく説明された。また、古典のインドの音楽であるサンスクリットの詩(「空から雨が降ってくるとその雨は全部海へ流れるように、様々な神への信仰は唯一の神へ向かう」)が講師の先生によってさいごに詠われ、生徒たちは興味深く聴いていた。質問の受け付けがあった後、終了した。)

5. 中国古代の宇宙論

神塚淑子先生(中国哲学) 2008年8月1日(金) 10:30-12:00

概要: 中国古代において、宇宙や自然をどのように認識していたのか、宇宙創世神話や「気」の思想、小宇宙としての人体の観念などについて話す。

(資料: A 3×1枚(授業全体のレジュメ)、B 4×1枚(死体化生説話に関する資料、『日本書紀』に関する資料、『淮南子』精神訓に関する資料)、A 4×2枚(『淮南子』天文訓に関する資料))

【自己紹介と導入】

中国の古代の思想哲学、宗教を専門としている。本日お話しするのは、中国古代の宇宙論である。137億年前に宇宙が誕生したとき、宇宙は暗黒であった。そこに最初の天体らしきものが出来たのがそれから8億年経った頃である。その後のことが具体的に分かってきたということで、本日の新聞にも載っていた。中国でも宇宙や天文については、非常に古くから関心を持たれていた。具体的には、大空がどうなっているのか、太陽と月の関係、天と地に囲まれた我々が生きている空間はどのように創られたのか、という関心である。本日はそのあたりのことを資料を使って紹介しながらお話しする。

【中国の宇宙生成論】

宇宙がどのように創られたかについて、天文学者によっても分からない部分が多くある。中国には、①天地創造の神話、②「道」「気」の観念を用いた宇宙生成論、があった。

まず、①について説明する。古代の中国の人々は神話という説明の仕方をとった。最も有名なの

は盤古神話である。盤古というものが最初に現れて、それが地を押し広げていったという話である。盤古神話が出てくる資料として、「天地渾沌として」から始まるものがある。その日本語訳は以下の通りである。「天地は渾沌として鶏の卵のようであった。盤古がその中に生まれた。一万八千年たって、天地が開闢し、陽の清らかな気が（上にのぼって）天になり、陰の濁った気が（下に下って）地となった。」「盤古」がどのような意味なのかは分からない。これは音を漢字に書き写したものであり、盤古という漢字に意味があるわけではない。「天地が開闢し」とは、天地が開けることである。「気」とは中国の思想や文化を考える上で大事なものである。我々は空気の中で生きている。目には見えないが、空気は人間だけでなくあらゆる動植物に必要な命のもととなるものであると中国の人は考えた。もともと気の字は甲骨文字から生まれた。中国で作られた最も古い辞書『説文解字』によれば、気とは運気を表す文字である。雲を形作るもやもやとしたものを表す。そのもやもやとしたものが雲になって空に浮かび、ある条件の下で雨となって大地に滲み込み、穀物が作られそれを人間が食べるという意味で、気は命のもとである。盤古が死んでそのような色々なものが作られたと考えられた。宇宙は全て盤古の死んだ跡形であるという話が盤古神話である。

また、資料の二番目として、「首めに盤古生ず」から始まる漢文を見る。日本語訳は「はじめに盤古が生まれた。盤古は、今にも死ぬという時になって姿を変えた。盤古の息は風雲となり、声は雷となり、左目は太陽となり、右目は月となり、四肢五体は四極（東西南北のはて）五岳となり、血液は江河となり、筋脈は大地の筋目となり、肌と肉は田の土となり、髪と鬚は星々となり、皮と毛は草木となり、齒と骨は金玉となり、精髓は珠や石となり、汗の流れは雨や沢となった」。地上のあらゆるもの、あるいは空の星などは、盤古の死体から生まれたという話である。これを神話学では死体化生説話と言う。死体が変化してあらゆるものが生まれたとする説話である。この話は、宇宙に存在するものもともと巨大なる存在の体の一部であるという考え方をもととしている。

日本ではこのような話はあまりない。いろいろな国の神話を調べると面白い。宇宙がどのように創られたのかということは決して遠い話ではなく、我々の体がどこから創られてきたのかという話でもある。我々の先祖を遡っていくと結局、宇宙はどのように創られたかという話につながっていくのである。

②（「道」「気」の観念を用いた宇宙生成論）について説明する。これは少し哲学的な話である。『老子』第42章に「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負いて陽を抱き、沖気 以て和を為す」と著されている。道（タオ）が最初にあったということは、天文学で言えばビッグバンが起こって最初のエネルギーが出てきたということである。しかしまだここでは暗闇の状態である。「一」とは元気（日本語の元気とは異なる意味）であり、「二」とは陰陽である。陰と陽のみであると分裂の危機がある。「三」は陰と陽に「沖」を加えたものであり、沖は中国的なものである。沖は陰と陽を仲介するものである。「万物」は陰を背中に負い、陽を胸に抱いて、中和の気によって中和がとられているものである。皆さん一人一人も万物の一つであり、陰、陽、中和の気で出来ており、道（タオ）という宇宙の最初のもが入り込んでいる。

漢代の初めに書かれた『淮南子』天文訓の中に、かなり詳しく天文学について書かれている。解説には次のように書かれている。「古くから文明の開けた国々のすべてがそうであるように、中国でも天文学はとくに発達した学問の一つであった。ここにいう天文学とは、現在からすれば天体観

測の技術という程度のことであるかも知れないが、少なくともその技術が相当に高度のものであったことは衆目の一致するところであろう。天文観測のことは、第一には作暦のための基礎作業としての意味をもつ。……第二にはいわば占星術にかかわる面をもっている。」中国では早くから天文学が発達していた。その背景には、一つとして、暦を作る必要性があったということがある。暦は非常に大切なものである。人間は、今日が何日であるかということが分からないと不安になるものである。中国では作暦は最も古い王朝である殷王朝の時代（紀元前1700年ぐらい）から発達していた。この時代から、十干十二支を使って日を表すということが行われていた。十干と十二支の組み合わせによって60種類が作られる。日本でも60歳を還暦（暦が一巡りする）というのは、中国の影響がある。紀元前1700年ぐらいからずっとこの暦が使われてきている。我々がここにいるということは、ずっと昔から続く歴史の最先端としてここにいるのである。中国は大多数が農民であるから、暦を基準として仕事をしていった。

天文学が発達した背景の二つ目に、占星術の必要性ということがある。当時、占星術は個人に関わるものというよりも、国に関わるものであった。中国では昔から、人間世界とは人間世界で完結しているものではなく、天の世界とつながっているものであると考えられていた。中国では天子が国を治めるという考え方があり、それが日本に入ってくると天皇という言葉になった。天子とは天の神の子どもという意味を持つ。天の神が地上の中で最も優れた者を選び、その者を天子にして人々を治めさせるという構造を持つ。天命を与えられる天子の条件とは、徳を持つということである。徳とは人々に対して恵みのあることを行う力である。中国では20世紀に清王朝が滅びるまでの間、ずっとこの天命思想が続いていた。日食、月食、大地震、大洪水などは、天の神が現在悪い政治であるということを知らせるための方法であると考えられた。このように、政治との関係で天文学は発達した。

「天地がまだ形のなかった時、〔混沌たるものが〕馮翼としてただよい、それはとらえどころがなかった。そこで、これを太始と名づける。やがて太始から茫漠たるひろがりを生じ、そのひろがり宇宙を生じ、宇宙は気を生じた。その気には〔清濁の〕区別があつて、清んで明るい気は、うっすらとたなびいて天となり、濁ってどろりとした気は、凝固して大地となる。清んだ気の集合することはたやすく、濁気の凝固するのは難い。そこで、天が先ず成り、地は後れて定まった。」これは天と地がどのように分かれてきたかについての話であり、盤古神話とほぼ同じである。ただ文章の表現が違っており、やや天文訓の方が詳しい。

天文訓は日本にも影響を与えており、『日本書紀』の冒頭にそのまま出てくる。「冒頭の文が『日本書紀』神代巻に見える天地開闢譚の種本であることはひろく知られている」という。『日本書紀』は720年に著された。「日本書紀巻の第一」の冒頭には以下のように記されている。「古天地のいまだ割れず、陰陽の分れざりし時、混沌れたること鶏の子の如く、溟滓りて牙を含めりき。その清陽なるもの薄靡きて天と為り、重濁れるもの淹滞りて地と為るに及びりて、精妙なるが合ひ搏ぐは易く、重濁れるが凝りかたまるは難ければ、天まづ成りて地後に定まる。」この部分は『淮南子』天文訓と同じであり、『日本書紀』によって盗作されたということが分かる。『日本書紀』が著された頃は奈良時代であり、日本の国が創られつつある頃であった。日本の国がそもそもどのように創られていったのかということをもとめるために著されたのが『日本書紀』であるが、日本の国の創造につ

いて著す前に、そもそも天地がどのようにして創られたのかを著す必要があった。そこでその部分については、中国の本をそのまま借りてきたのである。

【宇宙の崩壊と再生の思想】

宇宙は一旦出来上がると、ずっとその状態としてそのままあるのではなく、滅びたりまた生まれ変わったりするという思想がある。これには「気」の考え方が関連する。陰陽清濁の「気」の自然なる運行の結果として、宇宙は崩壊と再生を繰り返すという考え方である。生まれ変わる単位として半年サイクルというものがある。半年ごとに宇宙はリセットされるという考え方である。七夕伝説はそれと関係する。中国では現在でもポピュラーな話である。中国の七夕伝説には西王母という神が出てくる。西王母とは宇宙の全てを掌っている女性の神であり、その孫娘に当たる女の子がある時、地上に降りて来て、牛飼いの青年に出会って恋仲になる。その女の子は天の世界の者なので、西王母のもとに帰らなければならぬため空に昇っていった。牛飼いの青年はその女の子を追いかけて行ったが、西王母は玉勝（頭につける特殊な形のかんざし）を抜いて宇宙空間にさっと線を引いた。それが天の川になり、女の子と青年は天の川によって隔てられてしまった。男と女が会おうということは、陰と陽が交わるということで宇宙が新しくなるということである。もともと七夕は一年に一度ではなく、二度であった。正月七日（人日）にも七夕と同じような催しを中国では行っていた。例えば西王母の玉勝を紙で作って祀るなどである。これは農耕儀礼であった。

また、宇宙が減びることから思い浮かぶのは、終末思想である。道教という中国で生まれた宗教の中の経典として『太平経』がある。承負の観念（社会全体の罪が蓄積された結果、宇宙の「気」の疎通が妨げられ、諸々の災厄が起こるという考え方）と、それを救うために天の神が「太平の気」を注ぎ、宇宙は再生するという考え方である。

【宇宙と時間】

「宇宙」という言葉そのものは中国の古い言葉である。『淮南子』齊俗訓の編に宇宙の語の説明がある。「往古来今之を宙と謂ふ、四方上下之を宇と謂ふ」とある。「往古来今」とは古と今のこと、すなわち時間であり、「四方上下」とは東西南北と上下のこと、すなわち空間である。つまり、宇と宙にはもともとそれぞれの意味があり、宇は空間という意味であり、宙は時間という意味である。宇宙について考えるとき、単に空間だけでなく、時間について考える必要がある。我々が見ている天体の姿は昔の天体の姿である。例えば今見ている太陽は、8分前の太陽である。太陽から地球にまで光が届くのに8分ぐらいかかるのである。太陽は近いので8分前の姿を我々は見ることができるが、ずっと遠い星は何十万年、何億年をかけて地上に光が届いている。このように天文学は、時間と切り離すことができない学問である。

次に、時間をどのように認識していたかということについて説明する。我々は、過ぎ去った時間を取り返すことができないものとする。すなわち、時間を直線的に、不可逆的に捉えている。しかしこれは一つの捉え方であり、時間は循環するという捉え方もある。例えば自然界を流れる時間、春夏秋冬という四季は循環している。四季の変化を起こすのは陰と陽の気（温かい気と冷たい気）である。陽の気が強くなってくると暖かくなり、陰の気が強くなってくると寒くなる。「冬」という

文字は糸辺を付けると「終」という字になる。冬というのは終りの季節であるが、「終」という字は次の始まりがあることを意味する字である。終わって零になるわけではなく、冬の次にはまた春がくるといように循環している。このように、自然界を流れる時間は循環していると中国の古代人は捉えていた。

それに対して、一人一人の人間を流れる時間については直線的に捉えられていた。中国には輪廻の思想がないので、死んでまた生まれ変わるといようにには捉えられなかった。人は生まれた以上、どんどんと死に向かって一直線に進んでいくと考えられた。したがって、自然と人間との間には違いがある。これについては文学の世界において人間存在のはかなさとして詠われている。例えば日本人が好んだ詩人の一人として陶淵明がいる。彼の「帰去来の辞」の中には次のような文句がある。「木は欣欣として以て榮に向かい、泉は涓涓として始めて流る。万物の時を得たるを善みし、吾が生行くゆく休するを感ず」陶淵明は役人として使っていたのを辞めて、故郷に帰り農民として生きる生活を始める。近所の農民が陶淵明にもう春になったということを教えに来る。そこで田に出かける時の様子を詠ったのがこの文句である。「欣欣として」とは嬉しそうにの意、「榮」とは花咲く頃の意、「涓涓として」とはちょろちょろという意である。冬が終わって春になり、植物が新しく花を咲かせようとしており、泉の水が流れ始めている。このように万物が新しい生まれ変わりの時を得た様子を見て「善みする」、すなわちすばらしいと思う。と同時に、自分の命が次第次第に「休」、すなわち死という休息に向かっているのを感じるという詩である。自然と、人間である自分を対峙させているのである。

さらに陶淵明の「飲酒」其の十五には、「宇宙 一に何ぞ悠かなる、人の生 百に至る少なり」という対句の形で誦い上げた詩がある。自然界の空間と時間は何と悠かなるものだろう。それに対して、人間の命は百歳に至ることは稀である。このように、この詩もやはり、人間と自然を流れる時間の違いを感じて誦われたものである。

【小宇宙としての人体】

人体と宇宙の形状の相関性について、『淮南子』精神訓では、そもそも人間の精神は天から享けたものであり肉体は大地から享けたものであると説明される。これは陰陽思想である。母親の胎内で10ヶ月間、どのように形が創られていくかということを順番に述べている。人間が生まれると、五臓が創られる。宇宙との相似性については、「頭の円なるや、天に象り、足の方なるや、地に象る」と説明され、天に四時（春夏秋冬）、五行、九解、三百六十六日があるように、人間にも四支（両手両足）、五臓、九竅（九つの穴）、三百六十六節があると説明される。また、天に暑さや寒さがあるように、人にも喜びの感情や怒りの感情があるというように、天と人の体の中を対応させる考え方が古くから中国にはある。これがもとにあって中国の漢方医学ができていく。中国医学は、人間の体を部品ごとに見るのではなく、全体として見ていく。さらに人間の体全体は大自然と対応しているという見方をする。したがって、同じ病気になったとしても、春にその病気になった場合と秋になった場合とは治し方が異なる。このように、人体を全体として、そして自然の一部として捉えるのである。

次に、人体と宇宙との媒介項としての「気」について説明する。「気」を通じて人間と宇宙、す

なわち自然界とはつながっている。このことをはっきりと述べる資料は『莊子』知北遊である。「人之生は、気の聚まれるなり。聚まれば則ち生と為り、散ずれば則ち死と為る。若し死と生、徒と為れば、吾また何をか患へん。故に万物は一なり。……故に曰く、天下を通じて一気のみと」。人が生きるということは、気が集まった状態である。集まれば生きているということであり、散らばれば死という状態となる。このようにして、生きているということと死ということとはそれほどかけ離れたものではなく、仲間であるのであるから、どうして私は死を恐れる必要があるだろうか。いや恐れる必要はない。天下のものは全て、もとをただせば一つの気から出来ている。

これは、生と死は仲間であるから死んでも良いということを言っているのではない。全て自然に任せるということを言っているのである。現在、生を与えられているのであれば、存分に生を充実させて生きなければならない。しかし自然に死が訪れる時には、ことさらに死を恐れることなく、自分に与えられていた命をもとの自然に帰すということで、心安らかに死を受け入れるということを行ったものである。

【おわりに】

中国古代の宇宙論の話は、日本人として生きる我々にとって全く縁のない思想ではない。このような考え方は我々にもよく分かる部分がある。この思想は、人間が自然の一部として存在しているということ、非常に真剣に考えている思想である。その考え方の一端を今回紹介してきた。この考え方はまさに現代の環境問題といった大問題があるところにおいて、もう一度真剣に考えてみる価値のある思想である。よく「地球に優しい」というキャッチフレーズがあるが、よく考えてみるとこれは傲慢な表現かもしれない。「人間にとってずっと生きられる地球を持続させるために」、ということでこのような考え方があるのである。このような問題について考える一つの手がかりになるのが本日お話してきた内容である。人間は万物の靈長ではあるけれども、宇宙の中で生かされている一つの存在に過ぎないということを考えるきっかけとなるだろう。

(以上が講義記録である。その後、生徒から宇宙の語についての質問があり、それに丁寧な回答がなされた。高校生にとって難しい資料についても終始丁寧な説明がなされ、生徒たちは興味深く聞いていた。)